

「イースターおめでとう」

2023年04月10日

イースターおめでとうございます。イースターはイエス・キリストが十字架の死から復活した日である。主イエスの復活によって、キリスト教が成立した。キリスト教では最も重要な祝祭日である。主イエスはユダヤ教の過越祭中の安息日の3日目に復活されたので、復活日は、春分の後、最初の満月の次の日曜日とされ、3月の下旬か4月上旬の春頃になる。だから、毎年日にちが違う。今年のイースターは4月9日になった。

イエス・キリストの降誕日は、歴史的には分かっていないが、ローマの「太陽の祭」に対抗して、冬至に近い12月25日に定めた。イースターもクリスマスのように日にちを決めた方がよいのではないかという説もあるが、その可能性はないだろう。日本では、イースターはあまり知られてなく、クリスマスの方が祝われているようだ。しかし、北半球のヨーロッパでは、春の到来の喜びと相まってイースターが盛んに祝われるそうである。

主イエスの復活は4つの福音書に、それぞれ個性的に書かれている。

70年代に書かれた最初のマルコ福音書では、復活した主イエスは描かれてなく、白い衣を着た天使が「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」とだけ告げている。主イエスの最初の宣教の地ガリラヤで、主イエスの愛に倣って生きるところで、復活の主イエスとの出会いがあると捉えている。愛の交わりの中に復活した主イエスはおられるという理解である。

80年代に書かれたマタイ、ルカ福音書は、復活した主イエスと弟子たちがリアルに交流した姿が描かれている。マタイ福音書は最後に、「だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と、宣教使命を命じている。ルカ福音書は、復活した主イエスがエマオで弟子たちに現れ、エルサレムに留まって、聖霊の降るのを待てと命じ、天に挙げられたと書いている。

90年代に書かれたヨハネ福音書は、復活を疑うトマスに十字架に釘で打ちつけられた傷跡を示し、また、食事も共にしたと、復活のリアリティを描いている。福音書記者たちは、主イエスの復活の事実を伝えようと、当時の人々の表現法を踏襲し、驚きと喜びをもって書いている。これらの記述は、そのままを信じることはできないし、信じる必要もない。

聖書の中で、復活に関する最初の証言は、使徒パウロが50年代に書いたIコリント書15章である。パウロは、復活したキリストは弟子たちや多くの人びと、月足らず生まれたような私にまで現れたと述べ、「キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となりました」と、キリストの復活は確かな事実であると確信的に力説している。復活の体について、「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します。自然の体があるのですから、霊の体もあるわけです」と、自然の体（肉）ではなく、霊の体の復活であると語っている。霊の体は、肉の目では見えず、信仰において受け止められる。主イエスは十字架で殺されたが、霊の体で蘇り、今も、私たちと共におられ、命を与えてくださる。この復活信仰は、復活の主イエスを見たことのない私たちには、Iペトロ1章8節～9節の「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛しており、今は見ていないのに信じており、言葉に尽くせないすばらしい喜びに溢れています。それは、あなたがたが信仰の目標である魂の救いを得ているからです」に言い表されている。死から命へと復活されたキリストが共におられるので、どんなに破れていようとも、喜び、希望に生きられるのである。